様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 ２７ 日現在

機関番号：３２６０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ００７１９

研究課題名（和文）独日バイリンガル児の継承日本語での書く力を伸ばす「国語教科書活用法」の開発

研究課題名（英文）How to use language arts textbooks to enhance the writing skills of German-Japanese bilingual pupils

研究代表者
ビアルケ　千咲（Bialke, Chisaki）

大妻女子大学・人間生活文化研究所・研究員

研究者番号：７０４０７１８８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、独日バイリンガル児の継承日本語での書く力を伸ばす指導方法として「国語教科書活用法」を開発した。日独の国語教科書の分析を基盤に、両者に共通する文種（文章のジャンル）を取り上げることで、バイリンガル児の優勢なドイツ語で書く力を日本語でも活かす方法である。また特定の文種を書く際に必要な語や表現を増やすため、教科書の単元を相互に関連づける授業を行う。この方法を在ドイツ日本語補習校で実際に試したところ、書く力を伸ばせることがわかった。また、実際の授業づくりで効果的な指導方法も具体化することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の意義は、第1に、ドイツの学校における書く学習の指導方法の特徴を把握できたこと、また日本のそれとの共通点と相違点を明らかにできたことである。第2に、国語教科書を独日バイリンガル児の言語的特徴に合わせて使い、継承日本語での書く力を伸ばす方法を、実際の授業を通して示すことができた点である。
　これによって、バイリンガル児の指導に苦慮する在ドイツ補習校での授業づくりについて、具体的なヒントが提示できた。また、開発した指導方法は、日本の国語教科書を使って授業を行う、ドイツ以外の補習校や継承日本語学校でも実践可能な部分が大きい。

研究成果の概要（英文）：In this study, we developed a teaching method to enhance the writing skills of German-Japanese bilingual pupils who learn Japanese as a heritage language. Based on an analysis of Japanese and German language arts textbooks, our method focuses on text genres that are common to both languages. It aims at fostering the transfer of pupil's genre knowledge acquired in German to Japanese writing. Furthermore, writing activities are closely connected with reading materials, as well as grammar and vocabulary learning, which can provide appropriate linguistic resources to compose particular text genres. We have tested this method at a Japanese supplementary school in Germany. The results showed the usefulness of this method and further practical suggestions for effective instruction have also been obtained.

研究分野：日本語教育

キーワード：継承日本語　バイリンガル　書くこと　教授法　ドイツ　日本語補習校　文種

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

海外に住み、日本語を継承語とするバイリンガル児が、在外教育機関の日本語補習授業校（以下、補習校）に通い、日本語を学ぶことが増えている。補習校では日本の国語教科書が使用されるが、児童生徒に学年相当の日本語力がない場合、授業づくりは大きな課題となっている。ドイツの補習校で学ぶ児童生徒（以下、補習校児）の日本語作文の分析によると、補習校児が優勢なドイツ語で身につけた作文力は、日本語に転移している可能性が高いという（柴山他, 2017）。また補習校児は日本語の語彙や表現が少なく、その伸びはゆっくりであるため、複雑な内容を書こうとすると、構文や語彙の誤りが生じやすいことも指摘されていた。

他方で、ドイツ居住の補習校児は現地校で書く学習をしているバイリンガル児である。ドイツの学校では、大学入試に当たる高校卒業試験が長文の論述形式であるため、初中等教育を通じて体系的に書く力を育てている。書く力をつけるため、文種（文章のジャンル）の系統性を重視し、それぞれの文種の典型的な構成やよく使われる表現などを明示的に取り上げる指導方法が実践されている（ビアルケ, 2016）。バイリンガル児がある言語で既に「文種に関する意識」を持っていれば、それを使って他の言語で書く力を効果的に伸ばしうるとされることから（Gentil, 2011）、次のような着想により本研究を計画した。まずドイツと日本の「書くこと」の学習内容を比較したうえで、もし両国で学習する文種に共通のものがあれば、それを取り上げることによって、補習校児の持つ優勢なドイツ語で書く力が日本語に転移しやすくなる可能性がある。また二言語の指導方法にも共通するものがあれば、不足しがちな日本語の語彙や表現を効果的に増やせるかもしれない。そこで、日本の国語教科書を独日バイリンガル児の言語的な特徴に合わせて用い、文種の系統性に注目して書く力を体系的に伸ばす指導方法の開発を目指すことにした。

２．研究の目的

本研究の目的は、独日バイリンガル児が現地校で身につけた書く力を日本語へ転移させ、日本語の表現手段の不足を補うよう、教科書を用いる指導方法として、「国語教科書活用法」を開発することである。

そのために次の 2 つの課題を設定した：

＜課題 1＞　ドイツと日本の「書くこと」の学習内容と指導方法を比較し、その接点を基盤にして、独日バイリンガル児の書く力を伸ばす「国語教科書活用法」の枠組みを作成する。

＜課題 2＞　「国語教科書活用法」を実際に在ドイツ補習校で試し、どのような指導方法が書く力を伸ばすのに効果的であるかを具体的に明らかにする。

３．研究の方法

本研究では、前述の 2 つの課題に取り組むため、それぞれ以下の方法で研究を進めた。

＜課題 1＞日独の「書くこと」の学習の比較分析と「国語教科書活用法」の枠組みの作成

(1)ドイツの初中等教育のドイツ語科の教科書と教師用指導書を分析し、各学年での「書くこと」の学習内容と指導方法を整理して、扱う文種の系統性を把握した。

(2)補習校が使用している日本の小中学校の国語教科書（光村図書）と教師用指導書から、各学年の学習内容や指導の重点などを網羅的に抽出し、整理した。

(1)と(2)の比較分析により、日独の共通点と相違点を明らかにしたうえで、「国語教科書活用法」の枠組みを作成した。具体的には、まずドイツの現地校で学習する文種と、日本の国語教科書の「書くこと」の学習で扱う文種で共通するものを選び、「重点指導作文」として設定した。次に、日独の指導方法の比較により、補習校児の日本語での表現手段を増やすのに適した教科書教材の使い方を考案した。

＜課題 2＞研究協力校での試行による「国語教科書活用法」の効果の検証と具体化

在ドイツ A 補習校の小 1 学級および小 6 学級において、担当講師の協力を得て「国語教科書活用法」を実際に試す試行授業を行った。担当講師には、試行授業の内容と考察を記した授業記録の作成を依頼し、児童の書いたワークシート、宿題、作文等を提供してもらった。これらを分析し、効果的な指導方法を検討した。

４．研究成果

(1)＜課題 1＞に関する研究成果

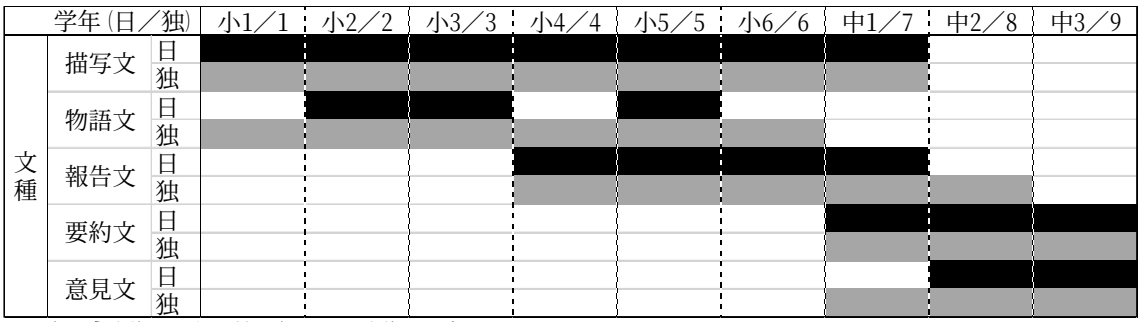
ドイツと日本の学習内容と指導方法の特徴を比較した結果、下記 3 点が明らかになった。

①ドイツの学校の「書くこと」の学習では、文種の系統性を重視し、児童生徒の発達段階に合わせて、扱う文種を難易度の低いものから高いものへと組んでいる。これに対し、日本では文種の扱い方や系統性が明確ではない。しかしながら、教科書はドイツと概ね類似した文種を取り上げている。

②ドイツでは、特定の文種を書く際の支援として、「聞く・話すこと」、「読むこと」、語彙や文法等の「言語事項」の学習を関連づける指導方法が一般的である。他方で、日本の教科書では各領域の単元間の直接の関連は少ない。
③ドイツの教科書教材には、日本よりも「スキャフォルディング」が豊富に用いられている。「スキャフォルディング」とは、学習者が一人で学習に取り組めるようになるまでの一時的な支援である。例えばドイツの場合、絵や図、課題に取り組むヒント、グループ活動等により難易度を徐々に高めるように学習活動が組まれている。

以上をふまえて、「国語教科書活用法」の枠組みと基本的な指導方法を考案した。その特徴は次の3点にまとめられる。
1)日独に共通する文種を補習校の「重点指導作文」とすることで、系統性が生まれるように扱い、バイリンガル児の書く力の二言語間の転移を促す。表1は、「国語教科書活用法」で取り上げる「重点指導作文」の文種（黒い部分）を示している。まず低学年では、物や生き物の特徴について情報をそのまま伝えるため、最も負担の軽い「描写文(beschreiben)」から扱い、続いて創作した物語や体験を主観的な視点から描く「物語文(erzählen)」を取り上げる。さらに、中学年から出来事の順序に沿って、情報を客観的に伝える「報告文(berichten)」（事故や事件の経緯や行事の報告など）も学ぶ。中学校段階では、説明的な文章や文学的な文章の分析の基礎的な作業である「要約文(zusammenfassen)」のほか、自分の主張を根拠と具体例で説明するため、認知的な負担の重い「意見文(argumentieren)」を扱う。
2)ドイツと同様に、国語教科書の「聞く・話すこと」「読むこと」「言語事項」の単元から、それぞれの重点指導作文を書く際に必要な語や表現を増やすものを関連づけて授業を計画する。つまり、書くために教科書教材を読み、話し合い、書く際に使える語彙や文法を扱う。ただし、日本の国語教科書は、各文種を書くために有効な語や表現、文法などをドイツほど多く扱っていないことも明らかになった。こうした学習活動は、日本語が継承語である補習校児には特に必要なため、補う方法を＜課題2＞で考案する必要性が生じた。
3)補習校における学級内の日本語力格差に対応するため、必要に応じて、同じ文種を扱っている下の学年やドイツの指導方法を参照し、それをスキャフォルディングとして活用する。

表1　「国語教科書活用法」で取り上げる日本語の「重点指導作文」（ドイツ語との対応）



日（日本語）：黒、独（ドイツ語）：グレー

(2)＜課題2＞に関する研究成果
＜課題1＞において考案した「国語教科書活用法」の枠組みと基本的な指導方法をもとに、実際に在ドイツA補習校において表2の試行授業を行った。

表2　在ドイツ補習校における試行授業の対象学年と内容

学年	試行授業の内容と意図
小1	「描写文」：生き物や物の特徴について書く力を伸ばす授業を行った。描写文は、説明的な文章の1つで、認知的な負担が最も軽く、文字学習を開始した児童に適している。
小1	「物語文」：物語文を書く教科書単元は小2から設けられているが、その準備となる書く学習を行った。教科書の物語文教材の読解をもとに、文の一部として人物の気持ちを書く力を伸ばす授業を行った。
小6	「報告文」：教科書教材の説明的な文章で扱われた実験を実際に試し、実験の報告文を書く力を伸ばす授業を行った。教科書教材の難易度が上がり、優勢言語と日本語の力のギャップが大きくなる学年において効果的な指導方法を探った。

上記の試行授業において収集したデータを分析した結果、主に次の5点が明らかになった。

①ドイツと日本の教科書で扱われる共通の文種を、補習校で「重点指導作文」として扱う方法は、補習校児が既に持っている優勢なドイツ語で書く力を日本語に生かすのに役立った。また、補習校児が二言語で似たような課題に取り組むことで、理解や取り組みがスムーズになる。その際、

目指す書く力の目標を、補習校児の日本語力を鑑みて無理のない設定にすることや、その目標に向けて書くことに役立つ教科書単元を関連づける「逆向き設計」の授業計画が有効であった。

②授業では多様なスキャフォルディングを行う必要があるが、特に次の 2 つが効果的であった。第 1 に、教科書教材と補習校児の日本語力のギャップを埋めるためには、補助教材のプリントや授業用スライドを作成する必要がある。補助教材には、絵や写真を豊富に入れ、課題には選択肢や穴埋めを使うなどして、難易度を補習校児にあったものに調整することが有効であった。第 2 に、書く学習を進める手順のスキャフォルディングである。まず書く内容について口頭で話し合い、次に全員で共通の書く課題に取り組み、最後に各児童にそれぞれ個別の内容で書かせるという手順で進めた。段階的に難易度を上げることで児童に無理なく書かせることができた。

③＜課題 1＞で明らかになったように、日本の国語教科書には、それぞれの文種の文章を書くための語彙や文法等を扱う単元が多くない。そこで書かせたい文種と同じ文種の「読むこと」の教材文から、よく使われる表現を取り上げ、児童に使わせる活動を行ったところ、効果的であった。宿題も活用し、書くための語彙や表現をくり返し使う機会を設定したことで、児童の書く力が伸びた。

④補習校は現地の教育制度における正規の学校ではなく、日本語学習に意欲的に取り組ませることは容易ではない。補習校児が関心を持つ学習テーマの設定を工夫するとともに、授業では意欲や集中力を維持する工夫が必要だとわかった。例えば、児童の状態を鑑みて、活動を切り替えたり、取り組む内容を臨機応変に微修正したり、授業でのルールづくりをすることなど、適切な学級経営の重要性が確認された。

⑤研究の過程において、小 1 児童の中には、ひらがなの学習にも苦労する児童がいることが見えてきた。ドイツ居住の補習校児は、その生活環境ゆえに日本語の文字に触れる機会が少なく、現地校では同時にアルファベットを学んでいるため、文字学習で混乱することがある。そこで、補習校児にもなじみのある「五十音表」を活用し、五十音順で扱う指導方法を試した。ドイツの教科書を参考にして、音韻意識を高める教材も作成して使ったところ、ひらがなの表記システムをスムーズに理解させることができた。また、児童が五十音表を自ら用いて自律的に書くようになった。

以上から、「国語教科書活用法」は補習校児の書く力を伸ばすことが確認できたといえる。また、試行授業から明らかになった効果的な指導方法は、小 1 学級と小 6 学級でおおむね共通していたため、他の学年でも応用可能であると予想される。

また、ドイツ以外の地域の補習校の場合、現地校で扱う文種がドイツとは異なる可能性はあるものの、応用できる部分も少なくないと考えられる。例えば、「書くこと」の指導において、身につけさせたいのはどの文種を書く力なのかを明確にし、その文種を書くために必要な語彙や表現を増やすため、教科書の「書くこと」以外の領域の単元を関連づけて扱うことである。さらに教科書教材と補習校児の日本語力のギャップをうめるための指導の工夫も実践可能であるといえる。

＜引用文献＞

①柴山真琴、高橋登、池上摩希子、ビアルケ（當山）千咲、ドイツ居住のバイリンガル小学生の日本語作文力、人間生活文化研究、27、2017、682－696
②ビアルケ（當山）千咲、在日ドイツ人学校における日本語カリキュラムの開発、母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究会、2016 年度研究大会発表予稿集、2016、82－83
③Gentil, G., A biliteracy agenda for genre research, Journal of Second Language Writing, 20, 2011, 6-23

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 ビアルケ（當山）千咲、柴山真琴	４．巻 34
２．論文標題 バイリンガル児の物語作文を書く力を伸ばす授業　－在独日本語補習校の小1学級におけるひらがなと物語文の試行授業から	５．発行年 2024年
３．雑誌名 人間生活文化研究	６．最初と最後の頁 152－168
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 ビアルケ（當山）千咲、柴山真琴	４．巻 33
２．論文標題 バイリンガル児の説明的な文章を書く力を伸ばす授業　－在独日本語補習校の小1学級における「描写文」の試行授業から	５．発行年 2023年
３．雑誌名 人間生活文化研究	６．最初と最後の頁 302-319
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 ビアルケ（當山）千咲、柴山真琴	４．巻 150
２．論文標題 独日バイリンガル児の継承日本語での書く力を伸ばす授業づくり　－在独日本語補習校における「国語教科書活用法」の試行にもとづいて	５．発行年 2022年
３．雑誌名 人文自然科学論集	６．最初と最後の頁 167－190
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 ビアルケ（當山）千咲、柴山真琴	４．巻 148
２．論文標題 継承日本語学習児の書く力を伸ばす「国語教科書活用法」－在独日本語補習校通学児の複数言語の力を活かした指導方法の開発	５．発行年 2021年
３．雑誌名 人文自然科学論集	６．最初と最後の頁 9-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 ビアルケ（當山）千咲、柴山真琴	4．巻 146
2．論文標題 論理的な文章の作成における教授法の日独比較　―中学校国語教科書の意見文単元に注目して	5．発行年 2020年
3．雑誌名 人文自然科学論集	6．最初と最後の頁 15-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 ビアルケ（當山）千咲
2．発表標題 独日バイリンガル児の書く力を伸ばす授業づくり　―補習校における実践例
3．学会等名 ドイツ地区現地採用講師研修会（招待講演）
4．発表年 2021年

1．発表者名 ビアルケ（當山）千咲、柴山真琴
2．発表標題 在独継承日本語学習児の書く力を伸ばす『国語教科書活用法』の開発
3．学会等名 母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）学会 2020年度研究大会
4．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	柴山　真琴 (Shibayama Makoto) (40350566)	大妻女子大学・家政学部・教授 (32604)	

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関